

第3回研究会

滋賀県栗東市の左義長調査に見る意味空間の変遷

—地域社会論の視点から—

龍谷大学社会学部・准教授・里山学研究センター・研究員

笠井 賢紀

本報告は、滋賀県栗東市において左義長（さぎちょう）という民俗行事に関して報告者が行った社会調査に基づく。本報告は栗東市の左義長に関する3件の地域社会調査に依拠する。第1は栗東町史編纂を目的として昭和末期に町が行った民俗調査である（以下、「栗東町民俗調査」）。第2は2016年に報告者が栗東市目川・岡の2地区で62歳から85歳までの男性10名を対象として行った生活史調査である（以下、「2016生活史調査」）。第3は2017年に報告者が栗東歴史民俗博物館の協力を得て、市内の全123自治会を対象に行った質問紙調査である（以下、「2017質問紙調査」）。それぞれの調査は、民俗調査（調査員による構造的聞き取り）、生活史調査（研究者による半構造的聞き取り）、質問紙調査と性格を異にする。栗東町民俗調査と2016生活史調査はデータを得るに留まらず、2017質問紙調査の設問デザインにおいて活用されている。これらの調査を併用することで、了解性の高い地域社会像の構成を目指す。左義長は、民俗的には神事（神送り、豊穰予祝）としての物語を有している。そして、伝統的な民俗だからこそ今も続けられている。そのため、民俗の継続には「継続しているという事実」以外の根拠が求められる。調査において、（1）「継続しているという事実」が今なお継続の理由なりえている地区も少なくないが、それらの地区では参加者数の減少や維持に問題が生じていること、（2）異なる根拠として主催者ではなく地域住民から必要性を訴えられて継続している地区があること、（3）主催者・地域住民ともに自覚的ではない役割が左義長にはあることがわかった。神事・民俗としての意味は農業中心の生活においては必要とされたが、現在では特に若い世代の非農家にはほぼ意味をなさない。昭和末期に正月飾りの処理という必要性が意味を持つことはあったが、現在では正月飾り自体が急減している。他方、住民らが自覚的ではないものの、左義長はこの地域においては子どもが担う行事であり、年に1度の子どものみが社会が現前するきわめて貴重で特殊な場であった。このことは、子どもが地域社会とつながり社会規範を内面化する「社会化」過程の重要な意味をもったことを示す。また、そうした場を味わった経験は彼らが高齢者になってもなお共有の経験として語りの資源となり、地域への恩返しという物語を紡いでコミュニティ・ボランティアへの契機を生む。